

外国人 SW の現状調査と効果的な介入方法

研究分担者 青山 薫 (神戸大学)

研究協力者 畑野とまと (SWASH)

浅沼智也 ((TRANS VOICE IN JAPAN)

山口治男 (神戸大学)

研究要旨

日本で働くセックスワーカー (SW) の中には、外国人も存在する。そして、外国人 SW も、性感染症の感染リスクが高い層である。しかし、外国人 SW は、外国人でない SW よりも法社会的立場が脆弱であり、その影響で感染リスク行動をとる可能性もより高いことが先行研究によって指摘されている。他方、外国人 SW はその脆弱性のために、脆弱性を克服するようなネットワークへのアクセスが困難にもなる。そして、このような社会資源に届かない立場にいる外国人 SW には、調査研究者にとって接近が困難であることもすでに明らかである。

そこで本分担研究では、まず、「エステ店」と街頭を対象にアウトリーチを実施し、現在日本で働いている外国人 SW の少数にアクセスを得た。そして、この人たちに半構造化インタビューを行うことで、言説データとネットワークデータを得、これらの質的解釈と分析から、この人たちがどのようなネットワークの中にあり、どのような社会資源にアクセスできているのかいないのかを具体的に明らかにした。さらに、具体例を基礎に、脆弱性を克服するようなネットワークへの接続あるいは変換の理路をモデル化し、最終的に、外国人 SW とその雇用者・関係者を対象に、実効性の高い HIV/STI 予防奨励と受検勧奨に向けた介入方法を検討した。

2020 年度は、新型コロナ感染症渦の影響で調査研究をすることができなかった。

2021 年度は、多言語・多文化に渡る調査を可能にするため、分担研究者が現在別途実施している性取引に関する国際共同研究からも知見を得て、1) 聞き取りについて基礎質問項目と「調査協力をお願い」を多言語に翻訳し、2) ネットワーク分析について当事者と雇用者等から得た人間関係情報を図式化するソシオグラム調査法を獲得した。また、3) アウトリーチ活動を行い、パイロットケースとして横浜伊勢崎の 1 人と大阪十三の 1 人の聞き取りに対し解釈・分析を行った。

2022 年度には、神戸と新宿におけるアウトリーチを経て、東京新宿で街頭に立つ 5 人の外国人 SW から記録を残す聞き取りを得た。そして、このデータをもとに、聞き取りの言説解釈およびネットワーク分析を行った。これらの結果から、本分担研究は、HIV/STI 予防奨励と受検勧奨の要は、「日本人の配偶者等」の資格をもって滞在している外国人 SW である、と結論した。理由は、1) 「日本人の配偶者等」は、外国人の脆弱性をもっとも低くする日本滞在資格であること、2) これをもっている SW は自己評価が高く自身の保健行動が安定している傾向であること、3) 滞在期間が長いことも含め、外国人 SW の中でも調査者などによるアクセスの可能性が高いこと、である。

以上から本研究は、「日本人の配偶者等」の資格で日本に滞在している外国人 SW に、より脆弱な外国人 SW のネットワークを強化しつつ、検査受診ほか保健行動奨励の意義と方法を伝達するネットワークの結節点、あるいは「当事者アンバサダー」になってもらうことを、実効性の高い HIV/STI 予防奨励と受検勧奨に向けた介入方法として提案する。

A. 研究目的および用語の定義

日本で働くセックスワーカー (SW) の中には、外国人も存在する。そして、外国人 SW も、性感染症の感染リスクが高い層であることは他の SW と同様である。しかし、外国人 SW は、外国人でない SW よりも法社会的立場が脆弱であり、それが感染リスク行動を促す構造的要因であることが先行研究によって指摘されている¹。他方、外国人 SW はその脆弱性のために、脆弱性を克服するような社会資源にアクセスすることが困難にもなるが、この社会資源は人的ネットワークに代表される。そして、そのような社会資源に届かない立場にいる SW には、調査研究者も接近が困難であることも、すでに明らかである²。

そこで本研究では、まず、現在外国人 SW が働いている現場でアウトリーチを行い、目標を少数に絞って SW にアクセスし、聞き取りを行ってテキストデータとネットワークデータを得た。そして、その質的分析から、この人たちがどのようなネットワークの中にあり、どのような社会資源にアクセスできているのかいないのかを具体的に明らかにした。さらにこれを端緒として、脆弱性を克服するようなネットワーク

への接続あるいは変換の理路をモデル化し、最終的に、外国人 SW とその雇用者あるいは関係者を対象とした、実効性の高い HIV/STI 予防奨励と受検勧奨に向けた介入方法を検討した。

なお、本研究における「外国人」とは、原則として、入管法による「特別永住者」と「特別永住者の配偶者等」を除く日本国籍以外の国籍を持つ「日本在留者」を指す。しかし、対象者が法律上どんな国籍であるかは聞き取りのみによっては不明のため、本研究では便宜上聞き取り対象者が自己申告する出身地をこの人の「国籍」国とする。なお、当事者による出自の表現は、「〇〇人」「〇〇と◇◇のハーフ」などさまざまである。また、本研究における「セックスワーカー (SW)」とは、売防法、風営法等関連法とそれらの運用、および STI 予防の必要性を考慮して、「他者に対して金銭を代償に性交あるいは性交類似行為を提供し、これを生業または生業の一部とする人」を指す³。

B. 研究方法

外国人 SW に対する調査は、多国籍・多言語を介して行われることが避けられない。そこで本研究では、2021 年度、第一に、聞き取りのた

¹ e.g. James Quesada, Laurie Kain Hart & Philippe Bourgois (2011) 'Structural Vulnerability and Health: Latino Migrant Laborers in the United States', *Medical Anthropology*, 30:4, 339-362, DOI: 10.1080/01459740.2011.576725

² 例えば、青山薫 (2012) 「日本における移住セックスワーカー—社会的排除に遭う変化の体現者」落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性

と親密性の労働』京都大学出版, 238-304

³ より一般的な「セックスワーカー/ワーカー」の定義では、提供する行為を「性的サービス」と広義に捉える (たとえば宇佐美 (2018) 「セックスワーカーとは誰のことか—社会の想定からこぼれるワーカーたち」SWASH 編『セックスワーカー・スタディーズ—当事者視点で考える性と労働』日本評論社: 48)。

めの基礎的質問項目と「調査協力をお願い」を多言語に翻訳し、ネットワーク情報を単純化・可視化する方法を探究し、第二に、当事者を中心とする人間関係を図式化するソシオグラム

(後述)を獲得した。そして、アウトリーチ活動を行い、パイロットケースとして関東地方で1人と関西地方で1人の半構造化インタビューを行い、語りとネットワークの情報をデータ化した。なお、第一、第二のために、分担研究者が現在別途代表として実施している、性取引に関する国際共同研究⁴とも連携し、その共同研究者・協力者からも知見を得た。

1. アウトリーチ

2021年度は、まず候補地を、関東地方では新宿地域、池袋地域、上野地域、町田地域、横浜地域、関西地方では大阪キタとミナミおよび三ノ宮と決めることに時間を費やした。また、前述のとおり、性風俗特殊営業店舗では外国人SWは原則として働くことができないため(働いていたとしてもそれは隠されているため)、アウトリーチは、街頭および性風俗特殊営業に該当しないいわゆる「〇〇エステ」店舗を対象とした。

この年、実際にアウトリーチを行ったのは、新宿周辺と横浜伊勢佐木町黄金町地区、大阪梅田の中崎町堂山町地区と淀川区十三周辺であった。その理由は、1)池袋、上野、町田および三ノ宮では、従来「立ちんぼ」の人が働いていると言われていた地区で人出が減り、外国人SWと思しき人がほとんど見られなかったことと、2)「エステ店」も多くが閉店あるいは休業していたことの二つである。新型コロナウイルス感染症渦の影響が疑われる。

時期は、いずれの場所でも2月中の断続的な2週間、時間は夜半から午前2時ごろにかけてであった。

新宿周辺では、この時期・時間に街頭に立っていたのは、ごく少数の東アジア出身と見られる人たちだけで、会話することは断られた。横浜では、2005年の「浄化作戦」以前までいわゆる「違法性風俗店」が軒を連ねていた京浜急行黄金町駅付近の高架下から一本離れた路に立つ8人と会話することができた。その内訳は、タイ人5人ロシア系という人3人であった。タイ人とロシア系のSWは、それぞれグループになって立っていた。うちタイ人2人とは記録のある聞き取りを行った。

なお、ここで「〇〇人」とは、対象者の自己申告に基づいており、その根拠が国籍なのか出身地なのか等厳密には特定していない。

大阪では、分担研究者が以前の別の研究でアウトリーチを行った梅田の4軒の「中国エステ」と1軒の「日本人エステ」と、十三の1軒の「中国エステ」と1軒の「日本人エステ」を対象にした。「日本人エステ」を含めたのは、「日本人エステ」と銘打つ店舗でも本分担研究が定義するところの「外国人」SWが働いている場合があるからである。この場合のSWは、外国人であっても入管法の就労資格制限の例外である「日本人の配偶者等」や、これらから派生した「定住者」といった、就労資格制限のない査証を得ていると言う人たちである。梅田でも十三でも、コロナ感染症渦でほとんどの店が閉店または休業していたが、梅田の「日本人エステ」で経営者とスペイン国籍と言うSW各1人、十三の「中国エステ」で経営者と中国人SW各1人と会話することができた。うち中国人の1人と記録のある聞き取りを行うことができた。

2022年度は、対象地域を、感染症渦で減っていた人出が戻りつつある実感があった2か所に絞った。関西地方で神戸市湊川公園から高速神戸線新開地駅南側に渡る湊川・福原地域、関東

⁴ 日本学術振興会科学研究費助成(基盤B)「移住性取引再考—グローバル化の苦痛を軽減するための調査研究」および「グローバル性労働と

人身取引の狭間にあるもの—聞き取りとネットワークの分析から」(国際共同研究強化B)

地方で新宿区歌舞伎町の都立大久保病院周辺から新大久保のいわゆるコリアンタウンに渡る地域である。神戸では、2022年9月初旬および2月中旬に、新宿では中旬から下旬に、それぞれ夜半から翌2時ごろにかけて、分担研究者と協力者が手分けし、街頭で客待ちをするSWと思しき人びとに対して行った。人出が多い金曜と土曜の夜には神戸では20人程度、新宿では30人程度、どちらの地域でも少ない夜には数人が客待ちをしているように見受けられたが、その中には日本国籍の人が入っていた可能性も高い。

記録を許さなかった人も含め会話ができた人は、神戸で中国人2人、タイ人1人、ベトナム人1人、国籍不明の人1人の合計5人。新宿では、タイとオーストラリアの「ハーフ」1人、タイ人2人、キューバ人1人、ブラジル人と日本人「両方」と言う人1人（返答はもらえなかったが日系人か）、ラオスとシンガポールの「ハーフ」1人、モンゴルと韓国の「ミックス」1人、中国人1人、国籍不明の人3人の合計11人。総計16人であった。

どの年度・どの地域でも、調査に対する警戒はおしなべて強く、はっきりと嫌悪感を露わにして立ち去る人、体よく別の場所へ案内する人、時間つぶしの立ち話には応じても踏み込んだ話は避ける人、申し訳なさそうに断る人、などがほとんどだった。

2. 聞き取り

聞き取りについては、来日前後と現在の人間関係情報、STD予防方法とその阻害要因、その他背景情報を中心に、半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューは、基本の質問項目を設定しておき、かつ、現場ではその項目すべてを網羅することや順番や正確な言い回しに囚われず、相手との会話の流れに応じて適切な応用を加える質的調査に代表的な聞き取り方法である。対価として、当初は1時間につき一律3000円の謝金を支払うこととしたが、3人

とも謝金は受け取らなかった。理由は教えてもらえなかったが、警戒心から路上で短時間の聞き取りになったためと考えられる。

21年度、横浜市内の路上でタイ人2人に、十三のカフェで中国人1人に、記録を残す聞き取りをすることができた。上述の通り、うち2人をパイロットケースとした。

22年度、記録を残す半構造化インタビューをすることができたのは新宿の5人のみである。聞き取りの場所は、聞き取り相手が指定したホテルの1室または路上で、時間は、交渉の間も含めて各人2時間程度。各人に、同等の時間に客を得て典型的なサービスをした場合の料金を申告してもらい、同額を聞き取り謝金として支払った。典型的な金額は1人につき15000円だった。謝金算出の考え方が前年度と違っているのは、とくに東京都心の街頭SWの収入のいわゆる「相場」に比べ、前年度の金額は安すぎ搾取的であると考え直したためである。

聞き取り項目の中でとくに重要なのは、STI予防とその阻害に関わる問題として、暴力的な人間関係の有無とその対処法、仕事、移民、人間関係をめぐる自己決定権の行使状況についての応答であった。

3. 倫理的な配慮

本分担研究は、外国人SWという特に脆弱性の高い人々を対象とするため、対象者へのプライバシーの保護とインフォームドコンセントについて特段の配慮を必要とする。したがって、「神戸大学大学院国際文化科学研究科における人を直接の対象とする研究に関する内規」に従い、研究倫理審査委員会による審査に合格したうえで調査を行った。

審査資料には、次の諸点を明記した。

- 1) 個人が特定できるような属性や調査地を明らかにしない旨配慮すること（個人情報保護にあたり、対象者についての情報を連結不可能匿名化すること）
- 2) 対象者には「調査協力のお願ひ」（別添資

料)を手渡しし、口頭でも説明すること

3)「調査協力をお願い」は、英語、中国語(簡体および繁体)、タイ語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語、ルーマニア語に翻訳しており、必要に応じて適切なものを渡すこと

4) 調査に対する同意書を求めることはせず、その代わりに、調査者側が同意を得て調査を行うことや守秘義務を守ることを約束し、署名した「調査協力をお願い」を対象者に渡し、相手が必要に応じて保管するものであることを相手に伝えること

4. 聞き取りデータのソシオグラム化

ネットワークデータ収集と分析は社会学に源泉を持つ研究調査方法であるが、現在さまざまな分野で応用されている。移民研究の分野でも、フィリピン大学のリッサ・ケイ・ケースズを始めとして⁵、近年、移民の社会資源を明示する人的ネットワークに注目し分析する研究が出てきている。とくに、本分担研究が対象とする外国人SWのような脆弱性の高いグループでは、ネットワーク自体に脆弱性や偏りが見えることを重く見て、その改善を目指す方向性も示されつつある。

しかしながら、ネットワークデータの収集にあたっては、まず必要なのは詳細な聞き取りであり、接近困難層への聞き取りの困難は先行研究が指摘してきたところである。エイズ対策研究事業でも、分担研究者が参加した2012の研究の報告にその経験が記載されている⁶。

また、聞き取りをされる側が脆弱性の高い人びとの場合はとくに、関係する人や出来事、経験を思い起こし、それらの関係を評価すること

が重い負担となる可能性や、記憶が不確かになる可能性が高い。さらに、多国籍多言語の対象者を想定せざるを得ない本分担研究では、聞き取り相手と聞き手の間およびデータ解釈・分析の際の、言語の壁による誤解が憂慮される。

これらの問題を克服するためには、1) 少なくとも接近し得た人に対する聞き取りの負荷を軽減すること、2) 調査者側にとって関心のある出来事や関係を対象者が回想することを容易にすること、3) データを図式化したり可視化して(聞き取りの最中には対象者とともに、解釈や分析の最中には協力者や研究者間で)確認すること、が有効である。これらを実現するためのツールが、本分担研究が採用したソシオグラム法である(具体例は下記)。重点的な人間関係のネットワークに関する表現のみをつかみ出し、単純な図式にするソシオグラムは、聞き手と聞き取り相手の双方が、聞き取り相手を中心とした人間関係あるいはその情報の何が重要視されているかだけでなく、何が欠けているか、隠されているかを想起させるものでもある。

C. 研究結果(2021年度)

1. アウトリーチの概要と考察

①横浜(伊勢佐木町)

伊勢佐木町では、タイ人コミュニティとつながる形で、タイ出身のトランスジェンダーSWが集住している。ここでお金を稼ぐことができると移住するのも、コミュニティの紹介によると言う。この人たちは街頭に立つが、コミュニティの中でSW同士で部屋を借り、その部屋に客を招いて仕事をする。そのため、中間搾取、管理者や客の暴力、逮捕や強制送還の危険とも少なく、安心して

⁵ Cases, R.K.C. (2021) 'Claims-Making and Recognition through Care Work: Narratives of Belonging and Exclusion of Filipinos in New York and London' in Schweiger, G. (eds) *Migration, Recognition and Critical Theory*, Springer, Cham. <https://doi.org/10.1007/978-3->

030-72732-1_6

⁶ 青山薫・要友紀子・八木香澄(2012)「セックスワーカーとの協働による予防介入プログラムの開発と普及に関する研究」厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)平成23年度 分担研究報告書

仕事ができる。他の生活上の困りごとともコミュニティ内で解決することが基本であると言う。ただし、医療についてはその限りではなく、閉鎖性がHIV/STI 予防と保健行動の阻害要因になっている可能性が高い。

ロシア系と言う SW のグループには聞き取りはできなかった。しかし、タイ人と言う人たちと離れて立ち、明らかに別行動を集団としてしていることは、やはり独自のコミュニティがあることを示唆している。

②大阪（梅田、十三）

大阪梅田は、伊勢佐木町と同様、古くからの歓楽街である中崎町兎我野町堂山町地区に、「中国エステ」「韓国エステ」「台湾エステ」ほか散在している。近辺には街頭 SW が客引きをしていることで知られる場所もあるが、2020 年末に行われた一斉摘発の後は一見して数が少なくなっている。一人一人離れて、多いときでも 2 人組で客待ちをしている女性と思しき人の中には、外国人と見える人もいる。しかし、声をかけても完全に無視されるばかりであった。また、十三では街頭 SW らしき人は 2021 年現在ほとんど見られなかった。

目的の「エステ」は、事前に調べた限りの店の多くは前述の通り閉店または休業していたが、店内で会話に応じてくれた梅田の「日本人エステ」の経営者は、2000 年代前半にはロシア人女性が「集まってくるので」、中で日本人と結婚していた人に場所を提供する形で経営していたが、その後何らかの形で届け出を変更し、「日本人エステ」としながら積極的に配偶者等の資格の外国人が働く場を提供している、と言った。「もちろん違法行為は提供しない」。この方法が、経営するにも働く側にも安全で、客にも人気があると言う。したがって、HIV/STI 予防については「うちは関係ない」と考え、あるいは建前を貫いている。これらの点は、同じ場で会話したため真意は不明だが、店に所属するスペイン人と言う SW も、日本語でいちいち合意していた。ほかにもスペイン

人や南米の同僚が、同じ理由でこの店に所属していると言う。この建前は合法店舗として必要で、その点、「エステ」も風営法届け出性風俗店と同様である。

話を聞くことのできた十三の「中国エステ」でも、建前の維持は同様であった。つまり、「うちはエッチはしない」という方向でしか調査者のような部外者には話をしない。そして、したがって、HIV/STI 予防についても感知するところではない。しかし、建前が建前でしかない店/場合が多々あることは、インターネット等の情報を見ても、後日「エステ店」とは違う場所で聞き取りに応じてくれた人の言(後述)からも明らかである。売防法や風営法に抵触しないよう、違法にならないよう経営されている業態だからこそ、性感染症予防や保健行動の奨励が経営の責任で無くなるというパラドクスがある。

2. 聞き取りの概要と考察

① 伊勢佐木町 T のケース

T (タイ出身、40 歳、SRS トランス女性) は、横浜伊勢佐木町で街頭に立って売春を行っている。日本滞在資格については話したくない。日本語は初歩的である。

セックスワークに従事する前はタイに住んでおり、「キチントした仕事」はしていなかった。自らを振り返って、「頭が悪い」し「トランスジェンダーはタイでは仕事がありません [でした]」と言う。タイを離れたのは、家族がトランスジェンダーであることを認めてくれず、また、「その場を離れなければ生活することができなかった」からだと言う。そして、「タイにもセックスワーカーはいますが、稼ぐことができません」と付け加える。タイを離れる前には、トランスジェンダー仲間から、日本ではセックスワークで稼げると聞いていた。

セックスワークに就いたのは、日本で働いている友人から「タイ人街なので安全に稼ぐことができることを知ったから」と言う。現在の 1 か月の収入は、「月に 50 万円ほど」で、タイの

両親に仕送りはしていない。セックスワークを始めたことで変わったことは、収入を貯めて、タイでSRSを行ったことである。仕事を始めるにあたっては、「タイ人のコミュニティで借金をして」日本に来たが、「借金は最初の年に返し切りました」と言う。休日は日本人の「彼氏」と会う。「彼氏」は複数いて「お金貰って」いる。

SNSの利用は、Instagramで友人とつながっているくらいで、家族とはSNSをふくめどんな連絡も取っていない。移住するにあたっては、日本に家族がいる友人が、タイ人街であるこの町を紹介してくれた。来日の際、特別な約束や契約はしておらず、その友人が、共用部屋の使用の仕方などセックスワークをするための環境を与えてくれた。

移住を後押ししたのは何かと問えば、「私は他に能力が無く、タイのトランスジェンダーは何かの能力が無いと稼ぐことができません。この状況でトランスしたいと考えた時に、セックスワークをしている人達がいることを知り、同じように稼いで、手術をふくめてトランスするために日本に行くことを決めました」ということだった。

何か問題が起きた時の援助については、「働いている場がタイ人街なので」、相談できる同郷の仲間が与えてくれる。また、「この地域ではセックスワーカーに対する差別がありません」とも付け加える。

STD予防の障害をふくむ暴力については、「一番怖いのは警察です。警察が取り締まりをしている時は連絡が入り仕事を休みます。また、お酒に酔った人から暴力を受けたこともあります」、「STDに関してはコンドームを使って予防していますが、コンドームを嫌がる客がいます」と言う。そして、その場でSWASHメンバーである聞き手にPrepの入手方法を相談した。一方、その他、STD予防の情報や知識、検査受検についてさまざまな具体的質問には、あまり回答はなかった。しかし、「保健所でのサービスは知りませんが、コミュニティで紹介され

た医師で検査を受けています」ということと、「Prepを入手する方法が無いので困っている」ことは明言した。

行政の役割についての質問には、「警察は取り締まりをする怖い人[たち]です」とのみ答えた。法律や規制が自分たちの権利を侵害していると思うかどうか、警察その他民間団体をふくむ組織が何らかの援助をすることがあるか、と言う質問には、すべて「わかりません」と回答した。しかし、外国人SWの利益のために、行政や関係組織に求める法律や規制の改善、見直しに向けた意見や提案を求めると、「多言語の情報が欲しい」と答えた。

セックスワーク自体に対する自身と周囲による評価については、「とくに意見はありません。タイにはトランスする前の友人はいません」と言い、関連して「家族を含めタイの人達とは連絡は取っていません」とも言う。この仕事の利益不利益については、「他の仕事ができないので判りません。この仕事なら稼ぐことができます」と言った。そしてこの仕事による変化について、もう一度、「お金を稼ぐことができ、手術などを行うことができ」たことに言及した。

そしてSWsが安全に、十分な稼ぎを得ることができるようになるには、「守ってくれる環境が必要」と考えている。

② 大阪十三Rのケース

R(中国出身、33歳、女性)は、大阪十三の「日本人エステ」で働いている。1度目と2度目は観光の査証で「中国エステ」に勤めセックスワークをするが、来日3度目で結婚しその後離婚したが、現在も査証は日本人の配偶者である。最初の来日から10年以上たっており、日本語はネイティブ並みに流暢である。

当初の来日時は、田舎から市部に出て務めた工場の給料が安く、他の仕事を探しに行った先で、友人の「姉」に日本に行くことができると勧誘され、田舎に帰るより冒険もしたかったために中国を出た。国を離れる前は「マッサー

ジ」の仕事と言われて来たが、最初の店は「中国エステ」で、「それはお客さんにイカせる店」だったと言う。それからは、店を替わっても「エステ」で働いたが、「本番」はない店だけだと言う。

SNSの利用については、中国ではウェイボー、日本ではTwitterとInstagram、ショートメッセージを普段のチャットや連絡に使う。店は宣伝はインターネットでしている。

セックスワークについては、最初は「不潔だから嫌だった」し「店の衛生もよくなかった」が、2軒目の後に「結婚して辞めたら誰も話す人もいなくなってお金も自分のでなくなつて、それが無理」で、現在の店に勤めるようになった。現在の店は、「店と女の子の取り分が半分ずつ」で搾取がなく、「ガイジンはほとんどいない」が中国人の友だちができ、「店長もお客さんもおとなしく」非常に良いと思っている。

今はコロナで店がほとんど営業せず、人の紹介などでサービスして1回1万円をもらう。ほとんど稼げないが「本番はやらない」。休む前は、毎日2万円ほど、月に40万~50万円の収入があった。離婚後コロナ前までは1年に1回正月に帰省し、両親などにも1回10万円渡していた。結婚していた時は少額だった。

セックスワークを始めてから変化したことは、「何も知らなかったのがいろいろ知ようになった」ことと言う。周囲の人については、中国の友人にも家族にも詳しいことは知らせていない。日本で元気に暮らし安定してお金を稼いでいることを、友人たちは「成功」と評価している。両親は喜んでいるが、今は収入が不安定なので心配している、と言う。

移住して仕事をするために「200万円の手数料」が要求されたが、貯金も親に借りることもできなかったため後払いにしてもらった。最初の店で3か月の滞在期間にそれを返済。だが、「後から考えたらもっと稼げたのに店にすぐ取られていた」と悔しがり、その店は、「女の子たちは長期滞在ではないので関係なんてでき

なかった。同じ出身地の先輩がいて仕事の仕方とか面倒を見てくれた」と言う。一方で、仕事を始めるためや移住するために借金をしたか、と言う問いには「していません」と答えている。

セックスワークを続けている理由は、「お金がいいから。中国に帰る気がないし、日本ではこの仕事しかできないから。主婦は嫌だから」。休日は、コロナ前は1週間か2週間に1回で、友だちや今の日本人の「彼氏」と遊びに行っていた。現在は休みばかりだと言う。

大まかな人間関係は、最初の店も2軒目も「中国エステ」で、だいたい同じ地方の出身者が集まっていた。2軒目は「ママ」も同郷だった。その2軒を紹介した「お姉さん」とは今は連絡を取っていない。「お姉さん」を紹介した友だちとは連絡もし、帰国時には会う関係を保っている。

来日しセックスワークを始めるにあたっては、約束や契約はなかったが、『マッサージ』は嘘ではなかったけれど、ほんとうでもなかった」、しかし、賃金や誰が働いているか、日本ではどんな生活になるかといった説明は「嘘ではなかった」と言う。3度の来日とセックスワークを続けることを後押ししたのは、前述通り「お金。それと冒険」に尽きる。

問題が起こった場合の相談相手はいる。一緒に働いていた友だちや今一緒に働いている友だちの中国人で、これも同郷の人ばかりである。しかし同郷でも「この仕事をしたことがない人には相談しません」と言う。今の店では、嫌なお客や無理を言うお客がいたら店のスタッフが注意するから問題にならない。お金も「正しくもらっている」し、今は配偶者査証を持っているため、「中国エステ」の時のように、警察と入管がいつ来るか心配したり、隠れて暮らす必要がない。「問題はコロナで仕事がないことだけ！」と結んだ。

STD予防やその阻害をふくむ暴力については、「2軒目の店でお客にレイプされ」、それが

その店を辞めた原因だったと言う。他には暴力行為にあったことはないが、『中国エステ』は本番しようと思えばできるから、やろうとする客はいた。しかし、1件のレイプ以外は本番はしなかったから、予防は必要なかったと言う。1軒目と2軒目の店にはコンドームは置いていなかった。最初の店は「女の子同士」も親しくなる機会がなく、情報や支援が少ないことが「キツかった」。今は、「手でする時もコンドームをすることになっている」が、コンドームは自分で買う必要がある。STD予防はコンドームのみで行っており、店の方針、周囲の同調があり、入手が容易なため容易、と言う。また、「本番やらせろみたいな客がいたら、すぐに店の人を呼んできてもらうから大丈夫」で、「店全体が本番なしだから、警察も大丈夫」と言う。ただし、現状では、店でなく客の部屋に行くことがあるため、それが不安材料になっている。

STD予防に責任があるのは自分で、コンドームがつけられなければサービスはしない方針を守っているため性病に罹ったことはない、と言う。一方で、これができたてきたのは「店のスタッフが守ってくれるから」とも言っている。同業者へのアドバイスとしても、「いい店に勤めること」を勧めている。しかしそれには「運も大きく」「日本語ができることが大きい」。したがって、「日本語ができないといい店も探せないし、騙されるし情報が入ってこないから、日本語をちゃんとやった方がいい」とも言う。また、上記のとおり同じ仕事をしている同郷の人が重要で、それは、中国人の中にもこの仕事をしていることを言えない相手が多く、中国人だというだけで助けになるとは限らないからである。

STD予防やその情報については、「よくわかりません」と答え、とにかく本番をしなければいいと思っているが、「やられたらどうするか、元の夫も客だったし、彼氏も客だったから、どこかで性病になってくるかもしれない」ことが不安である。しかし、中国語の情報から病院の

めどは立っており、ここでも「責任は自分にある。自分がしっかりするしかない。あとは友だちは大切」と繰り返した。

検査については、店が定期的に行い費用は給料から引かれていたと記憶している。「指から血を採る」HIVと梅毒感染を検出するキットで、店が用意し店が検査に出し結果も店から受け取っている。

地域の保健所で無料のSTD検査が受けられることについては知識がなく、その理由は「そんなに注意して見ていないから。中国語の情報で、中国人の同じ仕事の人たちの間でやり取りされないと、見ないです」と言う。そして、この知識を得た今後も保健所で受検しないだろうと言い、その理由として、今の検査が簡単なこと、「仕事がある間は値段は気にならない」こと、同僚も同じ検査をしていることを挙げた。

搾取や暴力の対策や支援については、最初の店で賃金を搾取されたことと、2軒目でレイプされたことを振り返り、最初は無知で、2軒目の時も「まだよく人間を知らなかったから」「自分を守れませんでした」と言う。そして、「今は違う。運もあるけど、気を付けて人を選ぶ、店を選ぶ、そのために準備するしかありません」とまた自己責任を強調した。しかし、最初は搾取されていると気づかず満足して中国に帰ったことにも触れ、「知識がつくと、後から悔しいこともできてくるということもある」や、「レイプの後には、2軒目の店のママは知らないふりをした」や、「強制送還されるので警察にも病院にも行かなかった」とも述べた。この時相談に乗って精神的に助けてくれた別の客と後に結婚し、3年後に離婚している。

行政の役割と影響については、「警察とは近づきになりたくありません」と言い、「中国エステ」で警察や入管による逮捕・送還を恐れていた思いを繰り返した。法律や規制による権利侵害を受けていると思うかどうかの問いには、「今は定住者なので、思いません」と答え、「前は権利はなかったと思います。でも自分で決めてき

たからしかたないです」と付け加えた。警察他、民間を含む組織の支援については、日本の警察や入管に助けってもらったことはない点、支援を受けたくもない点、自分は人身取引ではなく自分で来日したので、自助と同僚・友人と助け合う重要性を繰り返した。

この仕事や移住をする必要がある人々やしようとしている人々の利益のために、行政や関係組織に求めることについては、「送還しない、快適な生活ができて友人関係が保てるように仕事をさせてくれる、と言うなら、何かしてくれることがあれば関わってもいいです。例えば、年を取ったら、病気になったらどうしようと思うので、その時には悪口を言わずに助けてほしいです」と言った。

3. ネットワーク分析の概要と考察

① ソシオグラムの説明

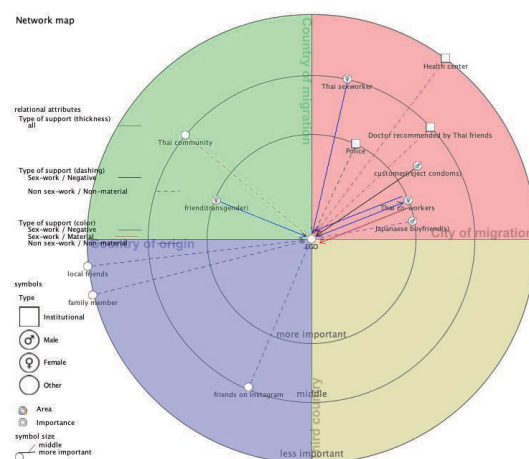
上記研究結果に掲載したネットワークソシオグラムは、聞き取りから得られた人間関係（人的ネットワーク）情報を元に VennMaker というソフトウェアを利用して作図したものである。ここでは、このソシオグラムについての考察を中心に行う。同情報は、上記の聞き取りのテキストデータ中にもふくまれているが、テキスト上のその他の情報は、ソシオグラムに考察を加える際にはいわば戻って参照し、「隙間を埋める」ことのできる情報である。

中心の EGO が聞き取り相手を、直線が関係を表す。EGO と直線で結ばれた□や○の印が、各アクターである。アクターには制度的な関係者や組織（□）と、個人（○）があり、個人はわかる範囲で男女に区別されている。

同心円は重要度の段階を示し、中心から離れるにしたがって、EGO とアクターとの関係の重要度は低くなる。そして、4 象限は、緑：ホスト国（日本）、赤：ホスト市町（仕事の場所および EGO の居住地）、黄：第三国（2021 年度の 2 ケースには無関係）、青：送り出し国を示している。

線の種類は、実線がセックスワーク、破線が非セックスワークにおける関係を、線の色は、赤が金銭の支払いなど物質的な、青が相談に乗るなど非物質的な関係を、黒が逮捕などネガティブな関係をそれぞれ示している。不明の部分も多い。

② T のソシオグラム



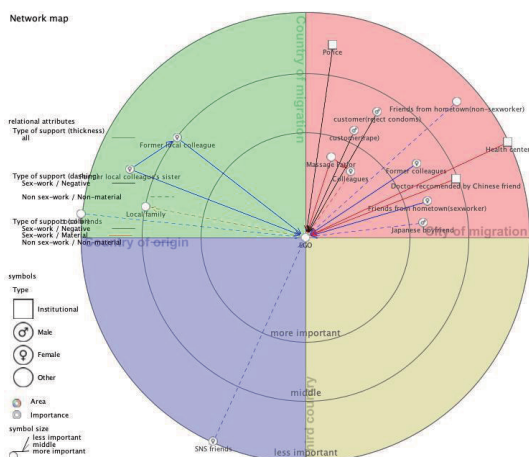
T のケースで一目瞭然なのは、EGO とその他のアクターの関係が他の関係から独立している点である。言い換えれば、T 以外の関係者同士はつながりを持っていないか、つながりがあっても聞き取りにはそれが現れていない。また、出身国タイとの関係は重要度、頻度ともに低く、つまり希薄で、かつセックスワークにかかわるものがない。濃密と言える関係は、ホスト市町である現在暮らし働いている「タイ人街」における同業者との関係のみである。ここには重要性だけでなく物心両面のサポートがあり、かつ心的（非物質的）関係は双方向的である。複数の「彼氏」との関係も物心両面的である可能性がある。

聞き取りデータに戻って総合的に考えると、T は、STD 予防・受検や行政の役割に関するものなど回答していない質問が多いことや、タイの人間関係について、切れていることを繰り返す以外に何も語ろうとしないことが、ソシオグラムによく表れていると言える。T の人的ネットワークは、現在のタイコミュニティ同業者以外とのもの以外希薄で、したがって、人的

ネットワークに代表される社会的資源も、このコミュニティの外からはほとんど調達できていないことが考えられる。もともと脆弱な立場に置かれ、だからこそそこから抜け出しにくい外国人 SW 同士のネットワークのみに頼っている T の現状は、その脆弱性を克服するために有効な社会資源にアクセスすることを難しくしている、とも言える。

ここから、STD 予防・受検に関係するつながりについては、現在まったく表現されていない EGO 以外のアクター同士のつながりを構築することが重要であるように思われる。例えば、医師と警察がタイ人 SW 同士のつながりと連携し、コンドームを拒否するなど暴力を未然に防ぐ必要性を共有し、方法を考案したり、事後の手当てや加害者処罰を本人に負担をかけずに行ったりすることが想像できる。あるいは、医師と保健所がタイ人コミュニティと連携して、今 T に不足している、日本における検査や医薬情報を提供するネットワークを構築することが想像できる。これらは、SW が脆弱性を克服するための社会的資源そのものである。

③ R のソシオグラム



R の場合は、現在生活しているホスト市町と出身地に関係が集中している。とくに日本における関係は、ネガティブなもの、物心両面、セックスワークか否かといった種類その他、重要度と頻度も多様であることが現れている。そして、僅かではあるが、EGO 以外のアクター同

士のつながりがあることも表現されている。それは、出身地中国とホスト国日本双方において同僚が関係するつながりである。換言すれば、R と同僚との関係は一对一の場合よりも複雑であり、かつ、出身地でも移住先でも独特の影響を持っているということである。もう一点目を引くのは友人である。頻繁に登場し、SW に限らないが同郷に限る友人たちが物心両面の関係をもたらしている。

聞き取りデータに戻って総合的に考えると、まず日本における関係が多様なことは、R の日本滞在歴が長く、回数もその都度の査証の種類もセックスワークの業態も違い、結婚離婚をふくめ日本での経験が豊かであり、そのため話題が多いことを反映している。そして、飛躍を恐れずに解釈すれば、出身地と現在の生活地が、国や制度的な介入をほとんど経ることなく、R 自身と同郷の友人や同僚との関係およびその人たち同士の関係によってつながっている、と言うこともできるだろう。

このネットワークの特徴は、興味深いことに、「自分が決めてきた」「責任は自分にある」「自分がしっかりするしかない」といった、R の自己責任論に、つねに友人が関係していることを端的に表している。もっと言えば、R にとって責任もって自己決定を行うべき「自己」とは、友人をふくむ「自己」であるときえ考えられる。

ところが、STD 予防・受検に関係するつながりについては、友人に紹介された医師以外は、R 自身との単独のつながりしか現れていない。このことから敷衍すれば、R が STD 予防・受検に関して脆弱性を克服する社会資源に近づくには、ネットワークの要点である同郷の友人と同僚に働きかけることが、少なくとも本人に働きかけるのと同等に重要と考えられる。

レイプとコンドームの拒否を含む客による暴力に対しても、事前に友人・同僚が介入し阻むことができるような環境を構築することが有効であろう。あるいは、現在本人に対するネガテ

ィブな関係しかもっていない警察が、事後にでも、救援や加害者処罰等ポジティブな介入をしてしかるべき、と確認することも可能である。

4. 2021 年度の結論

T と R は、世代、ジェンダー、出身地、第一言語、日本滞在資格の種類、来日回数、日本語習熟度、そしてセックスワークの業態において、かなり異なる属性をもっている。それらを反映して、日本での人間関係も、出身地との関係もかなり異なっている。R は T に比べれば、多様なネットワークにつながっているため、一般的には脆弱性を克服する社会資源へのアクセス経路もさまざまであろうと考えられる。

しかし、本研究にとって肝心の HIV/STI 予防・受検に関係する点では、2 人ともネットワークが希薄であるという共通点がある。そして、警察との関係がネガティブなものしかないことと、(T の場合は他のすべての関係が希薄な中でも) 同郷・同業の友人や同僚との関係が重要なものであることも、共通している。また、医師（病院）との関係は希薄ながらも意識されてきており、対照的に、保健所の存在は、無料検査をふくめて、今回質問に答えることによって初めて認識されたことも共通している。

他の情報や関係についても同様であるが、現在希薄な HIV/STI 予防・受検についての関係を強くするにはとくに、同郷の SW コミュニティに働きかけることが最も重要かつ効果的ということになる。そして、このコミュニティに対して医師・病院へのアクセスを現在より容易にすること、保健所の存在をアピールし頼られるものにするのが重要と言うことも、改めて確認できる。また、警察との関係も見直す価値がある。そもそも日本における法的立場が悪い外国人 SW と警察との関係は、とくに SW 側から見てネガティブなものにならざるを得ない。とはいえ、逮捕・送還を恐れて隠れるように暮らすことは、HIV/STI 予防・受検にかんするものをふくむ人的ネットワークの充実にとっての阻

害要因であることも間違いない。たとえば、医師（病院）や保健所が、SW コミュニティとのつながりを求めると同時に、予防・受検の促進のために警察に働きかけることは、日本の政策的現実からほど遠いだろうか。

以上が、2021 年度の 2 つのパイロットケースのみ、また、移民にとっての社会資源を明示する人的ネットワークのみ——その中でもとくに HIV/STI 予防の阻害に関する関係——に注目して得た結論である。これを踏まえて、2022 年度には、より多様な外国人 SW のネットワーク分析と聞き取りデータ解釈に進んだ。

D. 研究結果(2022 年度)

1. アウトリーチの概要と考察

2022 年度は、まだ新型コロナウイルス感染症渦の影響で繁華街の人出が少なかった年度前半に、分担者・協力者の移動距離を少なくすることも考えて、関西では神戸、関東では新宿を始めとした現場でアウトリーチを行うこととした。しかし、入国者に対する検疫措置のいわゆる「水際対策」が、2022 年 9 月に大幅に緩和された頃からは、繁華街に人出が戻り、とくに新宿でこれに応じて街頭に立つ SW と思しき人も徐々に戻ってきた実感があつた。

そこで改めて、期末の 2 月に新宿で、分担研究者と協力者 2 人が同時に集中してアウトリーチを行うこととした。この 2 月の週末には、歌舞伎町から新大久保にかかるおよそ 100 メートル×400 メートルの当該区域に、街頭に立って客待ちをしているように見受けられる人が合計 30 人以上いた。平日はばらつきがあり、日曜日は 6-7 人に減っていた。

観察から特筆すべきことは、神戸と対照的に、新宿では外見からも会話からも、明らかに多国籍の SW が混在し、混血国籍の人も目立っていたことである。混在していたと言っても、一定のグループごとに固まって立っていたり、ホテルに出入りしたりする傾向が見られたことも特徴的だった。一定のグループとは、大まか

に言ってエスニシティによるグループで、より具体的には、1) タイ語話者と英語話者である香港出身者とマレーシア出身者、モンゴル出身者を合わせた「東・東南アジア系」グループ、2) 英語話者であるフィリピン／オーストラリア国籍者と東欧系（詳細は不明）言語話者ほかの「白人」と見えるグループ、3) 南米系スペイン語話者と近くに立つ人を合わせた「南米系」グループ、4) 1人だけで立つ英語／ナイジェリア語話者の「黒人」と見える人、5) ラオス／シンガポール国籍の人ほか中国系と見える人の「中華系」グループ、といった5集団に分けられる人びとである。ただし、これらのグループは、日によって人数が変化したり誰もいなかったりする。参考までに、日本人と見える人びとは集団にならず1人ずつ別の場所に立っている傾向で、その一つの理由は、マッチングアプリを利用していることと思われる。

このようなエスニシティによる集団化あるいは非集団化は、今後、SWとエスニシティの関係、エスニシティと管理売春の関係、トランスジェンダーSWと出身地の関係、出身国・地域における人身取引の傾向、エスニシティによる顧客の傾向等、複数の研究調査課題を導き得る現象である。これらの課題は、すべてSTI/HIV予防とその阻害に密接に関係するため記載しておく。

とくに1)の「東・東南アジア系」のうちのタイ語話者8人ほどは、明らかにニューハーフで、集団的に客を取っており、この点で他のグループとの違いが際立っていた。路上SWと言っても、全員が1つの小規模ホテルTに自由に入出入りして複数で1組の客を相手にすることもあり、Tを拠点にして仕事をしていた。後の聞き取りで、このグループはTのトイレを使い荷物を置くなど「抛り所」を確保する代わりに、客が付けば部屋を利用して収益をもたらす約束をTとしていることが分かった。

2)の「白人」グループは、1)グループと同じ路地を棲み分けるように立っていた。互いに

協力しているようには見受けられなかったが、フィリピン／オーストラリアの「ハーフ」の人は、調査者と親切な感じで会話をする中で、記録を伴う聞き取りには応じられない理由の一つとして、「みんなに迷惑をかけると困るから」と言い、同グループの他者に視線を送った。グループは客待ちの間は頻繁に雑談を交わしていた。東欧系言語話者の2人は、トランスジェンダーに見え、客との交渉、現場への往復を一緒にしていた。

3)の「南米系」グループは、2人が現場でもお互いを常に気遣い、オフの時も連絡を取り合う「友だち」ということだった。この2人は聞き取りにに応じてくれたため、詳細は後述する。2人のうち1人によれば、別の1人は「いつも一人である」。「スペイン語も話す」が、「挨拶するくらい。お金にだけ興味がある人だから、話は合わない」ということだった。

地回りの「ヤクザ」が「たまに様子を見に」来て、トラブルがあったときには電話したりすると言う人もいたが、どのグループも現場外に監督・管理者がいるか否かは不明だった。しかし、4)の「黒人」の1人だけは、監督者・管理者の存在可能性を感じさせた。調査者と数言英語で会話したのち、それ以上の関わりを回避して、ナイジェリア語と思しき言葉で誰かに電話をかけたからである。

5)の「中華系」グループでは、聞き取りに応じてくれたラオス／シンガポールの「ハーフ」の人について後述する。この人は、当日立っていた他の3人など、同じ路地で仕事をする人は仕事のない日にも飲みに行く「友だち」であり、「寂しいとここに来て、1時間とか2時間とか居て、話したり」する存在、と言った。飲みに行くと、お互い中国語、タイ語、英語、日本語をミックスして喋る、とも言う。他の3人のうち1人は「タイ人」と言っていたことから、中華系タイ国籍者であることが伺われる。この人は、聞き取りに応じてくれようとしたが「言葉が分からない」というため断念した。

2. 聞き取りの概要と考察

聞き取りが可能だった人は5人。内容は、前述の通り、来日前後と現在の人間関係情報、STI 予防方法とその阻害要因、その他背景情報である。中でも、これも前述の通り、STI/HIV 予防とその阻害に関わる問題として、暴力的な人間関係の有無とその対処法、仕事、移民、人間関係をめぐる自己決定権の行使状況についてが重要であるため、以下、これらに絞って報告する。出身地、年齢、性別、性指向など属性はすべて当事者の自己申告による。

① 新大久保 M のケース

M (キューバ出身、37 歳、ヘテロセクシュアル女性) は、17 歳の時キューバで日本人男性 (21 歳) と知り合い、その後結婚して来日。現在は夫、娘 (4 歳)、夫の母と同居。来日当初 SW のことは意識がなく工場やレストランなどでアルバイトをする。しかし、賃金が安いいため、知人の紹介で週 3 日ほどマッサージ店に勤務し始め、街頭 SW も始める。店は合法店舗で出勤日も自分で決められ、電話一本で休むこともできる信頼できる店。街頭 SW は独自の仕事で、同業の友人 1 人以外、店にも家族にもキューバの家族・友人にも、誰にも知らせていない。夫との仲は悪く、娘の養育はほぼすべて M と義母が担っている。義母は誕生日にケーキを買って祝ってくれるなど、M のことを大切にしてくれる。同業の友人 1 人が常に助け合い、個人的な話もする相手と言う。

SW では、現在月約 10 本で 15-6 万円稼ぐ。自分と日本の生活費に使い、キューバの家族に仕送りはない。

この仕事のいいところは、お金がいいことと「コミュニケーション」。暴力的な人間関係は、仲の悪い夫も含め、まったくない。

客の中には「ストレスいっぱいとか、怒ってる」人もあり、稀に乱暴なため逃げなければならないこともあるが、通常は、「頑張って」リラックスさせることで危険を回避している。常に

近辺の既知のホテルを使い、逃げ方などを熟知していることでも危険を回避している。コンドームなしの本番は行わない。「生でやりたい」客は毎回いるが、客がしつこければ帰らせるか自分がその場を去る。「なぜ生でやりたいんだろう」という質問には「バカだから！」と即答している。

STI チェックそのものを心掛けてはいないが、健康保険 (夫のものか本人のものか不明) に加入しており、近所の病院の「いいお医者さん」で定期検診を欠かさず受けている。「保険証があるから安い」と感じ、必要性がないためか、保健所の無料 HIV/STI 検査については知識がなかった。しかし、コンドームの付け方なども含む性教育がキューバではカリキュラム化されており、M も 12 歳頃学校で週一回あった性教育の授業を受けているため、性感染症予防は「しっかりしている」。そのような性教育が「日本にはないの?!」と驚き、笑っていた。

配偶者資格で日本に定住しているため、キューバとの往来も、マッサージ店勤務も合法で、移民としての問題は感じたことがない。

② 新大久保 A のケース

A (ブラジル人と日本人「両方」、自称 28 歳、SRS トランスジェンダー/ヘテロセクシュアル女性) は、母は日本人だがスペイン語話者、父はブラジル人。14 歳の頃ブラジルでトランスし、仕事がないので 20 歳で来日 (前日には、父が母のいる日本に来て結婚し、A は日本で生まれ、いらい日本在住、と言う証言もしている。どちらが正確かは不明)。滞在資格について明言はないが、経緯から、いわゆる「日系人」としての定住資格ではないかと思われる。クラブなどでドラッグクィーンもしており、外国籍のドラッグクィーン仲間がいる。トランスの友だちはほとんどいない。路上 SW 同士はさまざまな牽制があり、喧嘩もあり、必ずしも連帯があるわけではない、と言う。警察の職質をよく受けるが、ほとんどが薬物検査で、「[麻薬

の] 売人が来ることもあるけど私はやらない」と言う。

個人輸入したホルモン注射を月1万円ほど打っている。SWについてはコンドームを必ず使用し、有料のクリニックでSTI検査を3か月に1度受けている。SWで怖い目に遭ったことはない。それは自分が人を選んでいるから。お客ともめないために、自分は「ニューハーフだ」と最初に必ず告げるようにしている。

収入がいくらか、貯金がいくらあるかは「いっぱいー！」と大笑いするだけで、教えたくない。自分のために使うことだけはっきり言う。しかし、その後、質問票を見返す調査者に対して嫌悪感を露わにし、「仕事じゃないよ。私ここにいるだけ。私エッチ好きだから」「私ちんぽ好きだから。タダ」とも言った。

調査への警戒の強さ、国籍や来日の状況と、SWを仕事とし収入を得ているか否かに関して発言にぶれがあるなどの点からは、自らの状況への他者あるいは公的なものの介入を嫌い、入管法あるいは売防法による摘発を恐れている可能性が伺われる。このことからさらに、Aには自らの法社会的立場に対する客観的な理解があることが伺われる。

③ 新大久保Lのケース

L(ラオスとシンガポールの「ハーフ」、37歳、ヘテロセクシュアル女性)は、十数年前(不明)に技能実習生として来日。60万円業者に払い、月収20万くらいと言われて来たが、手元に4万くらいしか残らない仕事だった。一緒に来日した人の中には賃金不払いなど「騙された」ような人もいた。その後「友だちの紹介」で日本人と結婚し、4年間「我慢して」「永住ビザ」(定住資格か?)を取得し離婚。15歳の娘(日本国内で別居)がいる。

結婚以来、ビジネスホテル、夫の母が経営するレストラン、バー、観光案内などのアルバイトをし、現在も昼間は宅配便の仕分け仕事をしている。路上SWをするのは資金難の時で、毎

日ではない。いつもの場所に1時間か2時間か居て、客がつかなければさっさと帰る。レストランで勤めた時の客など常連もおり、常連とは電話で連絡を取る。SWの月収は約16万円。通常、1時間15000円から2万円を取る。「5000円でやらせるみたいな人もいる」が、その時ははっきり断る。

常連と仕事をすることが多いので、暴力などの危険は少ない。危険と感じるのは、「生でやらせるみたいな人」、アナルセックスを要求する「最近増えてきてる」「変態の」客、酔った客。これらの客もはっきりと断る。「生ではやらない」と決めている。しかし、聞き取りを始める前に声をかけた調査者の1人には、「ゴムなし」で60分15000円、「90分でもいいよ」とも言っていた。

路上では喧嘩もあるが、逃げ出してくるSWがいると「外で私たち助けられる」。客に盗みを働かれる時もあるが、噂もよく回る。つまり、近辺の見知ったホテルで見知った同業者と働くことで、危険に対処あるいはこれを回避している。また、いつもの路上の同業者たちは、寂しいとき話をしに来たり、オフの時に朝まで飲み続けるような「友だち」だと言う。

昔は「面倒見」料を払っていたような、ヤクザの人たちは警察が厳しいため最近はいない、と言う。巡回している警察も、「ヤクザだけ気を付けてね～」と言って帰っていく。しかし、一度だけおとり捜査の警官に捕まったことがあり、その時は、2週間留置された後仕事を一時止めた。薬物捜索の職質もあるが、薬はやらない。警察とはそれ以上の関係はない。

シンガポールに年に1回ほど帰国(コロナ期以外)。父が死んで以来帰国は減少。母と弟が、シンガポールとラオスの両方でシイタケ栽培を家業とし、そのためにした約150万円の借金をLが「頑張ってるんで」返済。現在も月15万(毎月ではない)ほどずつ仕送りをしている。

国民健康保険に加入し、収入に応じて医療費・健康診断費が安くなることを評価している。STIについても健康診断を受けることで検

査になると考えている。STI 予防ができない時はない。保健所で無料の STI/HIV 検査が受けられることを知っているか否かについてははっきり返答せず、「健康診断受けているから大丈夫」と繰り返した。国民年金にも加入している。

第一言語のラオス語と現生活言語の日本語のほか、タイ語、中国語、英語を話すと言う。日本語とタイ語が非常に流ちょうであることは確認できた。

④ 歌舞伎町 H のケース

H (モンゴルと韓国の「ミックス」、24 歳、非 SRS トランスジェンダー女性) は、自ら来日して 4 か月。日本語学校に通学している。日本に来たのは日本のアニメが大好きで憧れがあったことと、モンゴルではトランスの SW は「稼げない」(1 回 3000 円ほどにしかない) ことから。モンゴルに元彼がいる。今は、とにかく日本語が上手になりたいので、日本語の先生になってくれる友だちを探している。モンゴルに戻る気は無く、日本で生活していきたい。モンゴルのトランスジェンダー差別は「けっこうきつい」。トランスだとばれると男性から殴られることがある。知り合いのトランス女性は殴られていた。H は「ばれないので」大丈夫——ホルモンだけで手術はしていない。顔も手術などしておらずノドボトケもほとんどなく「親に感謝している」と言う。韓国の父はすでに亡くなっていて、行ったことも無い。

1 か月前から歌舞伎町で働いている。モンゴル出身で在日 7 年目の知人が、立ちんぼの場所や、やりかたなどを教えてくれた。立っている場所には、タイとフィリピンのニューハーフのグループがいるが、あまり仲良くはない。別に仲の良い友達はある。日本語があまり得意でないので、客が付きそうになった時点で自身がニューハーフであることを告白する。ニューハーフとわかると、かなりの人が断ってくるので、稼ぎはそこまで良くない。1 本もできないこともよくある。朝まで仕事や待機をし、始発で帰

る生活。平日は少しだけ寝てから学校に行く。

コンドームは、アナルでもオーラルでも必ず使う。お客が射精を要求してくるが、ペニスをいじっても射精は苦手な断ることが多い。ホルモンの作用で乳腺が痛くなることがあり、それを客が力強くつかんでくるのが嫌だ。また、ホルモンの作用で鬱様になることがある。

暴力などは無いが、警察にいろいろ聞かれることと、たまにヤクザがきて、強い口調で脅したり睨みつけてくるのがとても怖い。

⑤ 歌舞伎町 S のケース

S (中国南部出身、24 歳、シスジェンダー女性) は、日本のアニメが好きで 3 年前独自に来日。「中国の南の方」から来た、と言うが、初めて会う調査者に素性を明かしたくないと言い、H とモンゴル語で非常に流ちょうに会話していたことから、元来はモンゴル出身の可能性もある。

専門学校を卒業した後、現在の 1 年間のビザが切れると資格を替えなければいけない、と言うことから、現在の滞在資格は、卒業後就職活動を行うための特定活動資格と思われる。国民健康保険に加入し、マイナンバーも持っていると言う。

ホテル、引っ越し業、コーヒーショップでアルバイトをしていたが、2 か月前から街頭 SW を始める。現在もコンビニで昼 12 時から夜 8 時まで働いた後、あるいは夜勤で朝まで勤めた後、街頭に立つ。いつも近くで立っているタイ人のニューハーフの人にクラブで会って息が合い、問題を抱えていることを相談すると、「先にお金がもらえる」仕事として SW を紹介された。問題とは、借金が 70 万円ほどあり家賃も滞納していることで、その理由は、心臓が悪い 12 歳の妹の病気が悪化して高額医療がかかるため、自分の貯金をすべて出身家族に送り、友人にも借りたからだと言う。

通りすがりの男性から、「ここ変な人とかいっぱいいる」「警察の人たちもいっぱいいる」から

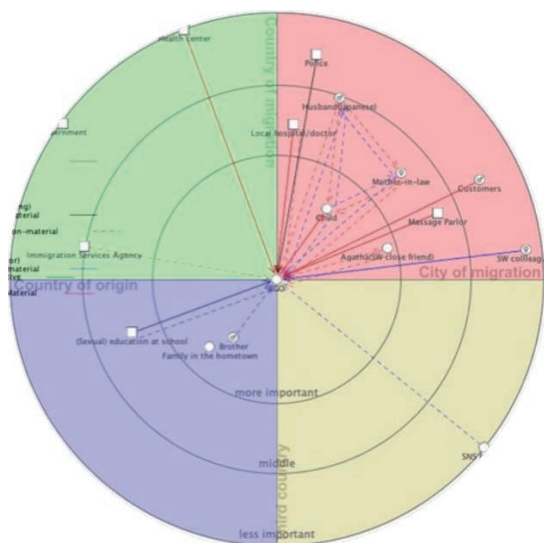
危ないと忠告を受けたり、一度私服警官に咎められ、初めて見る顔なのですぐに辞めるように、と言われただけで見逃されたことがある。しかし「お金の問題が終わったら、すぐやめる」つもりなので、「ちょっとだけ頑張ろうって、自分に言う」。ニューハーフの仲間に仕事の仕方を教えられ、「この仕事のルールがちゃんと」分かっている。そのため、暴れる客や窃盗する客の話も聞くが、自分は悪い客には当たっていない。

ホテルに入る前に客に必ず確認し「ゴム無しではダメ」とはっきり言う。「ゴムあり中出しもダメ、アナルもダメ」と言うと帰る客もいるが、性病などの問題を強く意識している。フェラチオもキスもせず、「ゴムありで手でするだけ」と言う。仲間とする3Pは気に入っている。

中国人の知り合いは多いが、みな親が金持ちでバイトもしておらずクラブなどに行けばかりるので、誘われても付き合うことはない。対照的に、一緒に立っている「ニューハーフの子たちはみんないい子ばかり」と言う。

3. ネットワーク分析の概要と考察

① M のソシオグラム



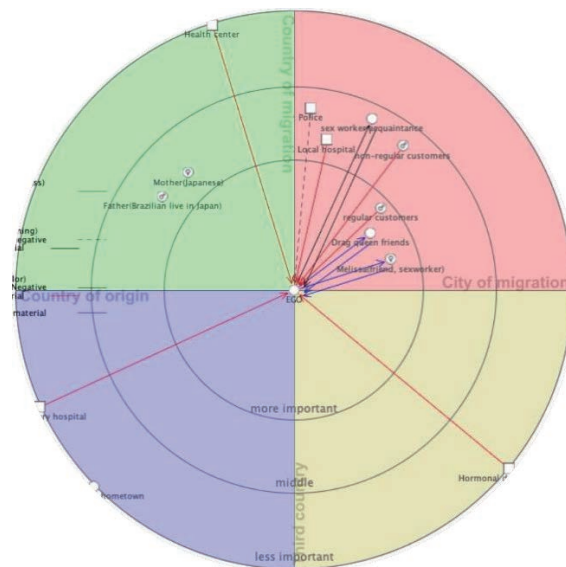
日本の家族との関係で、非SWで物理的・非物理的な支援が見られる。この支援は相互的か

つ各アクター同士のつながりもある。

対照的に他の関係は一方向的で、アクター同士のつながりもなく、それぞれ別個の関係になっている。家族以外で相互的なサポート関係を保っていると見うけられるのは、一人の友人だけである。SWについて、所属する店を含めてこの友人以外の誰にも打ち明けていないことをよく表している。

特徴的なのは、性教育を受けた出身国の学校との関係で、SWに関する関係と非SW関係の両方があり、比較的重要度の高いものとなっている。これは、SW内外での性感染症予防等性の健康と権利を守る知識と実践が、子どもの頃の学校教育に基づいて行われているからである。

② A のソシオグラム

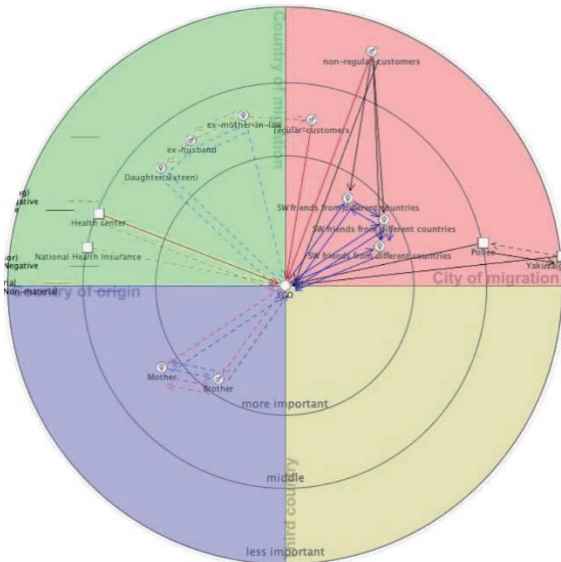


特徴的なのは、まず、SW以外の関係についてほとんど表現されていないこと、次に、重要度が高い関係は非物質的支援を相互にしているSW関係の唯一の友人と、ドラッグシーンコミュニティだけとなっている点である。Aが語りの中ではたくさん貯金があると言い、それは自分のためだけに使うと言っていることをよく反映している。他のSWたちとの関係はネガティブなもので、警察との関係はネガティブでもSWに関わるものでないことも特徴的である。

両親との関係についてはどのようなものか明

らかにされていない。また、EGO 以外のアクターたち同士はまったくつながりを見せていない。語りでも明らかだったが、トランスジェンダーとしての孤立からか、複雑な人間関係については表に出さないことが強調されている。

③ L のソシオグラム



とくに聞き取り時間が長かったわけでも、聞き手との関係が近かったわけでもないが、5人の中でもっとも複雑な関係が表現されている。L がとくに他の4人と異なるのは、SW、非SW両方に関わる関係において、異なる象限で複数のアクター間に相互関係がある点である。つまり、SW、非SWともについてネットワークが充実しており、社会的資源へのアクセスが良好なことが伺われる。

これは、L が結婚を経た定住者であり、日本の家族や健康保険等制度あるいは多業種の就業機会とつながりが保たれていることと、同じ路上に立つ同業者たちと友人として支援しあっていることに由来する。このことは、保健活動が物理・経済的に可能であるばかりでなく、語りにおいて明らかだった、生活者としての安心・自信があることを表していると言える。

ただし、SW に関するネガティブな関係も多く、これと SW 外の相互支援的關係がつながっていないことも特筆すべきである。健康保険制度・行動が確保されていても、警察とはヤクザ

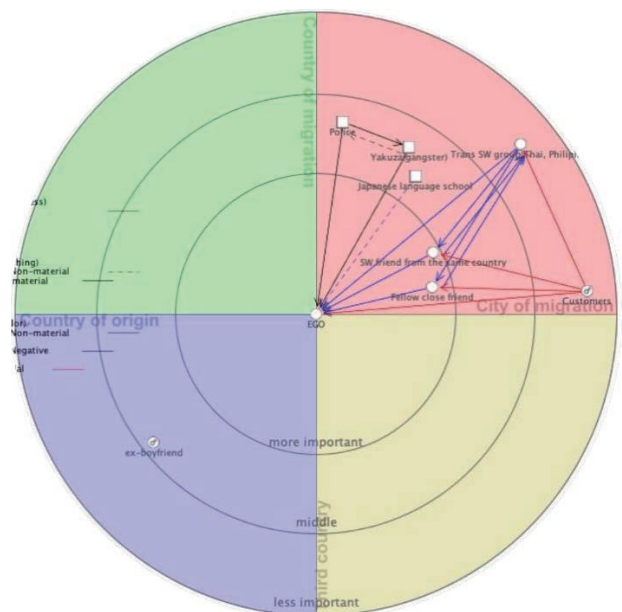
との関係と同様の負の関係しかなく、SW に関わる負の関係であることは注意要とする。

④ H のソシオグラム

H のソシオグラムは、SW に関するもの以外の関係をほとんど表現していない。このことは A と共通し、二人がトランスジェンダー女性であることとも関わっている可能性を示唆する。H は、語りにおいて出身地でのトランス差別と虐待を明示し、これを移民の理由と暗示しているが、それ以外の出身地での経験や関係についてはほとんど言及していない。

他方、SW 関連の関係は充実している。SW を始めて間もないながら、最初に仕事を紹介した友人がおり、共に仲がよいわけではないと言うものの、「東・東南アジア系」集団に属しているため、SW についての非物理支援ネットワークが確保できている。

EGO と SW 外の関係として表現されているのは語学学校のみであり、いわゆる外の世界につながる語学学校が、社会資源の充実に重要な役割を果たすことが考えられる。それは、H の場合、SW 関係内で行っている STI 予防活動が自助努力に尽きることを考慮すればなお、重要であろう。

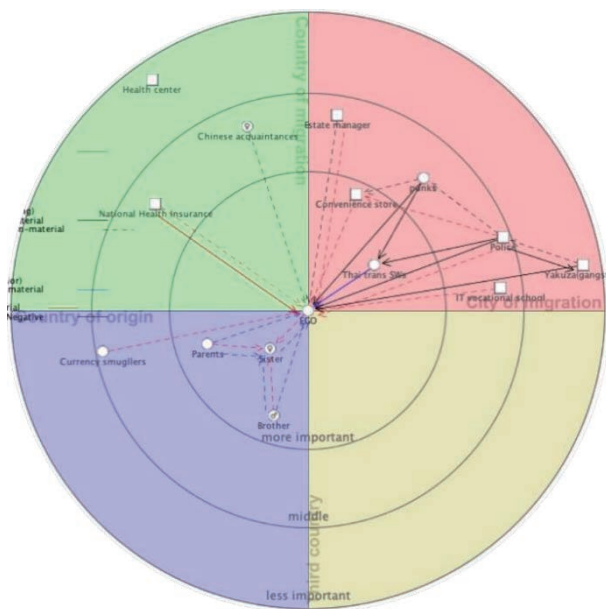


⑤ S のソシオグラム

出身地家族との関係の重要性が高い。その関係は、妹に向かう経済的支援が中心となっている。家族以外にも、非 SW に関わる関係について SW 関係よりも多く表現されていることが特徴である。

そして、SW 関係はほとんどネガティブなものとなっている。その中でわずかにタイのトランス SW らとの関係が非物質的かつ重要なサポートであり、健康保険に加入していることが物質的サポートになっている。しかし健康保険の重要性はさほど大きく表現されてはいない。

うらはらに、SW 外の関係の種類が多く、SW 外関係のアクター同士はつながっていないものの、アルバイト先であるコンビニエンスストアは、SW と非 SW の関係の接点となっている。学生資格で来日し、以来 3 年間と言う比較的長い期間滞在していることを反映していると思われる。このような S の場合は、配偶者資格を持ったことがないにもかかわらず、ネットワークが豊かで社会資源へのアクセス可能性が高いことを表している。



⁷ 箕曲在弘・鈴木琢磨 (2018) 「新大久保地区における在留外国人住民の多国籍化——都市部

4. 2022 年度の考察

アウトリーチおよび 5 人に対する聞き取りとネットワークの考察を通じ、STI/HIV 予防とその阻害を左右する条件・環境をテーマ別にまとめれば、①国籍または出身地、②日本滞在資格、③公的機関との関係、④ジェンダー になる。以下、この順に説明する。

①多国籍・混交国籍／出身地

新宿歌舞伎町新大久保エリアの路上 SW のもっとも目立った特徴は、アウトリーチを行った他の地区と比べて、多国籍でかつ混交国籍・出身地の人に接触できたことである。理由の詳細は移民研究に譲るべきだが、2000 年代に入った頃には新宿区民の多国籍化について議論されていることから (箕曲・鈴木 2018) ⁷、地域社会全体の傾向を反映していると言えるだろう。混交国籍あるいは出身地の人聞き取りに答えやすかった理由も、この地区で混交国籍の人の母数が大きい可能性があるが、定かではない。いずれにしても、本研究にとって重要なのは、このような特徴をもった「外国人」SW が路上で客引きをしているということと、前述の通り、エスニック集団内に分かれたピア支援を行っている傾向がみられること、ピア支援はとくに東・東南アジア系の SW に目立つことである。また、上述の「黒人」と見える人と参考情報としての日本人と見える人たちのように、エスニシティによって孤立している場合にも注目する必要がある。

②入管法上の安定的在留資格

1) 日本人の配偶者等

一般に、日本人の配偶者や日本国籍者の親として滞在資格を持っている人、離婚後定住者になっている人は、入管法上の就労制限がない。そのため、SW においても、合法の風営法店舗等で合法に働くことができるし、売防法の適用

の多文化共生を考える前に——」東洋大学社会学部紀要、53-2：49-65

のされ方も日本国籍者と同等である。移民であることによる法社会的脆弱性が低く、路上 SW をするにしても、具体的には強制送還の心配が少ないなど、他の資格で日本に滞在している外国人 SW より安心して働くことができる。

配偶者等の資格は、日本の家族関係とそれに連なる人間関係だけでなく、より間接的に、就労制限がないゆえの SW 以外の就業経験と関係をもたらししていた。このことが、人間関係のネットワーク——ひいては社会資源へのアクセス——を充実させることも明らかであった。

上記と、聞き取りした結婚経験者 2 人が、安心に加えて暴力回避行動や保健行動につながる自己評価の高さを表していたこととの相関関係は、注目に値する。

なお、聞き取りした A がこの資格なのか否かは明らかではなかったが、日系人として滞在をしている人の場合も、結婚（と離婚）や日本人の親としての場合と同様、「定住」という資格を得て、同等の法社会的立場の強さを得る。

2) 留学生資格

入管法は、留学生としての滞在資格を持った人が性風俗特殊営業店舗等で働くことを禁止している。売防法に抵触した場合は、日本国籍者とは異なり、強制送還を受けることになっている。しかし、聞き取りとネットワークの考察から明らかになったのは、留学生資格による人間関係・社会資源上の利益である。

留学生資格を得ればまず 2 年間、その後 1 年間は、学業が修められており経済状況が許し、法に抵触しない限り日本に滞在し続けることができる。風営法店舗に所属することよりも、売防法で現行犯逮捕されない限り法に抵触していることが曖昧な街頭でセックスワークをする方が、留学生にとってはリスクが少ないとも考えられる。また、留学生資格はアルバイトをすることができる資格でもある。長期滞在が保証され、アルバイトができれば、配偶者等に準じるとも言える人間関係および就業経験と関係のネ

ットワークが形成でき、多くの社会的資源をもたらすと言える。

具体的には、結婚経験者にも見られた健康保険制度への加入とこれを中心として意識される保健行動や、SW の外の世界とのつながりによって何らかの助けを得、暴力や性感染症リスクなどの危機回避に役立つ可能性が、本研究の注目するところである。

③ 公的機関との関係

1) 警察

警察との関係はネガティブなものでありながら、SW についてほとんど介入されないものであることが、5 人全員に共通する経験であった。実際に SW が立つ街路の端に警官が常駐する交番がある歌舞伎町とやや離れた新大久保地区の両方で、少なくともこの数年間は、警察は路上 SW について「見て見ぬふり」を貫いており、大阪とは対照的であった。つまり、警察は、SW を摘発もしない代わりに危険から守ることもしない。STI/HIV 予防についても知るどころではない、と思われる。

2) 保健所、医療施設、健康保険制度

5 人のうちに、保健所の無料 STI 検査について知識があると言った人はいなかった。何らかの健康保健に加入している人は、かかりつけの医者・クリニックがあり、そこで全体的な健康診断を受けていた。一般的な保健行動は良好であると言えるが、セックスワークを仕事としていることを考えると、とくに STI についての心配にも対処にも言及がないことが際立つとも言える。

また、健康保険に加入しているか否かに関わらず、現場での STI/HIV 予防はコンドームを使うことがもっとも強調されていた。しかしこれは、すべて個人の嗜好と自助努力に任されている状態であり、公的介入の経験の表現はまったくなかった。

④トランスジェンダーとシスジェンダー

1) トランスジェンダー女性

外国人としての脆弱性を低下させる定住者などの滞在資格をもつ人でも、トランスジェンダーであることによって、出身国や家族との関係が希薄である可能性が示された。また、結婚して配偶者資格のメリットを享受する可能性は低く、日常における差別もあるため、多様な就業経験・人間関係を構築することに困難も大きいと思われる。ヤクザなどによる路上ハラスメントも明らかである一方、ハラスメントから身を守るコミュニティとつながることができるとは限らない。

タイ人トランス SW は、横浜の場合と同様コミュニティと言えるものを形成していることが明らかで、ここに少数とはいえ他のアジア系の SW もシスジェンダーでもふくむ形で、非物質的相互支援を手厚く行っていた。他方、このコミュニティは閉鎖性も強いようで、調査者を遠ざけるばかりでなく、他のエスニシティを持つ SW にとっては近づきたいものと映っていた。したがって、トランスジェンダー全体の脆弱性を軽減するコミュニティとは言えないところがある。

2) シスジェンダー女性

トランスジェンダー女性とシスジェンダー女性の脆弱性には、決定的な違いがあると考えられる。繰り返すが、シス女性は、結婚と多業種への就業の可能性がより高いことから、日本社会における家族と職場を通じた経験と人間関係につながり、制度にもつながり、より充実したネットワークを築く可能性も高い。SW の外に広がるネットワークは、SW 内の危機回避のためにも、保健行動のためにも役立つ社会資源を代表していると言えるだろう。

5. 2022 年度の結論

以上から、2022 年度の本研究は、STI/HIV 予防奨励と受検勧奨の要は日本人の配偶者等の資格をもって在住している SW である、と結論した。

入管法に抵触する可能性が低く、仮に売防法で逮捕されても強制送還の可能性がほぼない配偶者等の資格者は、SW を含む日常を安心して過ごすことができる。同時に、定住や定住意欲が高く経済的にも比較的安定していて、自己評価の高さが保健行動や STI/HIV 予防行動にもつながっている。これらは、当事者にとってプラスであるばかりか、調査や予防介入を考えたときに、外部からのアクセスが比較的容易であることを意味する。

本研究の限界は、アクセスできた対象人数が少ないことに加え、アクセスがより困難な「不法残留者」などおそらく脆弱性ももっとも高い SW には聞き取りできていない点である。この層に接近するには、日本人の SW や元 SW に調査協力をしてもらっただけではうまくいかないことは、先行のエイズ対策研究事業でもすでに指摘されている（東ほか 2010）⁸。また、本研究では、脆弱性が低い層の警戒を解き、STI/HIV 予防の自助努力を越えて広く介入するには、SW と非 SW ネットワークの間、および、孤立した個人をつなぎ、公的機関同士の横の連携をつくり、これと当事者の関係を構築するアクターが必要である。

アクセスの可能性がより高い配偶者等の滞在資格を持った SW に働きかけて、現在つながりが薄い各アクターをつなぐアクターになってもらい、ネットワークを強化し、検査受診・保健行動奨励の意義と方法を伝達してもらえば、脆弱な層の脆弱性を軽減できるのではないだろうか。

⁸ 東優子・要友紀子・八木香澄・タミヤリョウコ・鍵田いずみ・青山薫・野坂祐子（2010）「個別施策層（とくに性風俗に係る人々・移住

労働者）の HIV 感染予防対策とその介入効果の評価に関する研究」平成 21 年度 総括・分担研究報告書

この結論から、2022年度の本研究は、日本人の配偶者等の滞在資格をもつ外国人SWをエイズ予防研究・政策の一環としてリクルートし、外国人SWに向けたSTI/HIV予防と受検の「アンバサダー」になってもらおうという提案をした。

E. 結論

本分担研究は、代表的性風俗街でのアウトリーチによって少数の外国人SWに対して聞き取りを実施し、その言説データの解釈とネットワーク分析を行った。その結果明らかになったことは次の通りである。

1) ネットワークが脆弱な人も、逆に多様なネットワークをもち社会資源へのアクセスが良好であると思われる人も、HIV/STI予防・検査受検そのものにつながるネットワークは皆無または希薄である。たとえば地域の保健所と無料検査の存在は、本研究の調査者の質問によって初めて認識されていた、あるいはそのように見えた。

ただし、それぞれ異なる経験とネットワークをもつ聞き取り相手全員が、かかりつけ医師やクリニックとの関係を（重要と思わない場合もあるが）意識していた。とくに、安定的な滞在資格をもち、日本に家族がいたりSW以外の就業経験がある人については、公的健康保健に加入し、定期検診を受けることによって性感染症の検査も兼ねることを意識していた。

2) 警察との関係がネガティブなものでしかないことも共通していた。実際の逮捕経験を持つ人は1人しかいなかったが、すべての人が何らかの理由で摘発されることを恐れており、できるだけ関係をもたないことを心掛けていた。警察側の態度は地域によって違い、新宿では、巡回もするがSWについてはほとんどの場合「見て見ぬふり」をし、当面は摘発もしなければ保護もしないようであった。ただし、積極的に「保護しない」し、聞き取り相手にポジティブな認識を持たれていないとはいえ、その存在

が、客や（存在が定かでない）ポン引きやヤクザなどによる目に見える暴力の抑止力になっていることは考えられる。

3) いわゆるヒモやポン引き、トラフィッカーなど、人身取引・管理売春・中間搾取をする者との関係が表れないことも、かなりネットワークが希薄な人も含めた共通点であった。聞き取りをできた相手の語りやソシオグラムにこれらが表れないからと言って、存在が皆無であるとは限らない。また、これらとの関係が強いSWたちは、そもそも聞き取りには応じられないのかもしれない。それにしても、外国人SWたちの中で移民もセックスワークも比較的自由に行っている人が相当いることは希望である。つまり、少なくともこの層に対しては、検査受検や保健行動奨励に対する阻害要因が比較的少ないと考えられるのである。

4) 全員にとって、同郷・同業の友人や同じエスニックグループに属する同僚との関係の中に、少数重要なものがあつた。SWについて、あるいは移民について、この関係のネットワークで行う場合がほとんどだった。暴力回避を含むピア支援は、とくに東・東南アジア系のSWに目立っていた。また、同郷であることとトランスジェンダー女性であることが重なった、タイのトランスジェンダー女性SWには明らかにある程度の規模のコミュニティと呼べるものが存在していた。他方、このコミュニティは閉鎖性も強いようで、調査研究を含む第三者の介入や、同業者でもエスニシティの異なるSWとの関係構築を阻害する働きをもっていた。同郷者のコミュニティが、他の属性のマイノリティコミュニティと容易には積極的な関係を持ちえない所以である。

加えて、2022年度のアウトリーチの概要に記した日本人と見える人たちのように、エスニシティによって孤立している場合にも注目する必要がある。

5) 外国人SW内における格差に目を向けると、まず、トランスジェンダー女性であるかシ

スジェンダー女性であるかによる社会資源格差に気づく。

トランス女性は 出身国・出身家族との関係が希薄であり、結婚による配偶者資格を得たり多様な就業経験をもって、豊富なネットワークを保持することもシス女性よりも難しいと思われる。日常的差別やヤクザなどによる路上ハラスメントから身を守るコミュニティとつながることができることも限らない。

他方、シス女性は、結婚と多業種への就業の可能性がより高く、日本社会における家族と職場を通じた経験と人間関係、健康保険制度などの公的制度にもつながり、より充実したネットワークを築く可能性が高い。シス女性のこの状況は、SW に関係するネットワークの外に広がるネットワークが、SW 内の危機回避のためにも、保健行動のためにも役立つことを表している。

6) さらに明らかな格差は、日本滞在資格の種類に依る。上記の通り、シス女性が手にしやすい日本人の配偶者等の定住資格は、他の資格に比べて、家族関係も就業関係も多様に広くするまさに「パスポート」として機能しており、この資格を保持する人たちの社会資源へのアクセスを充実させ、脆弱性を弱めていた。そしてそこでは、制度的なメリットだけでなく、本人たちの安心と自己評価の高さが、暴力回避行動や保健行動につながっていることも示されていた。

留学生としての滞在資格も、セックスワークを摘発されれば強制送還の対象になる「弱さ」があるとはいえ、やはり明らかに人間関係・社会資源上の利益をもたらしていた。学生でいる間と就活をする間の長期滞在が保証され、アルバイトも合法にできるこの資格を保持すれば、日本人の配偶者等に準じるとも言える社会的資源をもたらす可能性がある。具体的には、健康保険制度への加入を中心とした保健行動や、SW の外の世界とのつながりによる援助から、暴力や性感染症リスクなどを回避する可能性で

ある。

以上から、本分担研究は、二年間の成果として次の結論を導き出し、提案を行う。

まず、HIV/STI 予防奨励と受検勧奨の要は、「日本人の配偶者等」の資格をもって滞在している外国人 SW である。理由は、1) 「日本人の配偶者等」は、「外国人」であることの脆弱性をもっとも低くする日本滞在資格であること、2) これをもっている SW は自己評価が高く自身の保健行動が安定している傾向であること、3) 滞在期間が長いことも含め、外国人 SW の中でも調査者などによるアクセスの可能性が高いこと、である。

ここから、「日本人の配偶者等」の資格で日本に滞在している外国人 SW をリクルートして、「当事者アンバサダー」になってもらうことが、実効性の高い HIV/STI 予防奨励と受検勧奨に向けた介入方法である、と提案する。「当事者アンバサダー」は、外国人 SW というキーポピュレーションに属し、かつ、他の資格を持つ／滞在資格を持たないなど、より脆弱な外国人 SW との関係を構築し、介入のための調査研究や政策とつなぐ役割をもつ。それは同時に、脆弱性の高い外国人 SW のネットワークをセックスワークの世界の外につなげ、多様化・強化するネットワークの結節点になることである。換言すれば、当事者のネットワークの外部接続・多様化・強化の中にこそ、検査受診ほか保健行動奨励の意義と方法を伝達する回路が開かれる、と本研究は考える。

しかし、上述の通り、ジェンダーや出身地や滞在資格の種類等によって外国人 SW の中にも格差があり、相互的關係構築の阻害要因が多数ある。「当事者アンバサダー」にもアクセスが困難な「当事者」がいる。したがって、「当事者アンバサダー」は1人ではなく、目立ったエスニシティの複数人、ジェンダーが異なる複数人などに頼み、できるだけ身近な SW コミュニティに働きかけてもらうことをめざす。

「当事者アンバサダー」たちには、調査研究

者や政策担当者に限らず、すでに SW に意識されている医師や病院、そして意識されていない保健所と、当事者コミュニティの間の結節点にもなってもらう必要がある。

ただし、HIV/STI 予防奨励や受検勧奨とは管轄のまったく異なる警察や入管に、しかも触法性の高い当事者が、積極的な形でつながることは現在の日本では不可能に思える。したがって、警察・入管との関係構築は、調査研究者や HIV/STI 予防政策担当者の責任となる。逮捕・送還を恐れて隠れるように暮らすことが、HIV/STI 予防・受検に関するものをふくむ人的ネットワークの充実にとっての阻害要因であることを、関係各所に訴えていく必要がある。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文・著書発表

- 1) 青山薫, セックスワーク研究における当事者参加行動調査, 社会学評論, 2021, 71(2): 215-232
- 2) 青山薫, それほど新しくない「新しい家族」——同性婚の保守性・革新性, 落合恵美子編著, どうする日本の家族政策 (いま社会政策に何ができるか ③), ミネルヴァ書房, 2021:258-272
- 3) 青山薫, 性的なことは政治的 The Sexual in Political——市場・国家・宗教・人権・生存を問う「LGBT」, 日下渉, 青山薫, 伊賀司, 田村慶子編著, 東南アジアと「LGBT」の政治——性的少数者をめぐって何が争われているか, 明石書店, 2021: 347-374
- 4) 青山薫, コラム——十三の「中国エステ」で働くということ, 伊藤泰郎, 崔博憲編著, 日本で働く——外国人労働者の視点から, 松籟社, 2021: 399-312
- 5) 青山薫, 持続化給付金等支払請求事件意見書, 令和 2 年 (行) 第 455 号, 東京地方裁判所民事第 51 部 2D

2. 口頭発表

- 1) Kaoru Aoyama, Sex Workers and the Right Approach: the International Legal Framework, *Intersections: Global Dialogue on Gender, Development & Social Justice*, Asia Institute of Technology, Gender and Development Studies Program, 15/11/2021, Bangkok/Online
- 2) 青山薫, 日本における移民難民問題——「外国人」が暮らしやすい社会のどこが良いのか, 「移民難民問題と私たちの社会」, 神戸大学国際文化学研究所第 21 回公開講座, 2021 年 10 月 2 日, 神戸
- 3) 青山薫, 氾濫する性風俗言説・表象をどう読み解くか, 学習院大学身体表象文化学会, 2022 年 8 月 13 日
- 4) Kaoru Aoyama, *Sexual Minority Politics in Japan (in the World)*, IGS Seminar, Institute for Gender Studies, Ochanomizu University, Tokyo/Online, 9 November 2022
- 5) Kaoru Aoyama, *Research on Migrant Sex Work: Examples of Network Analysis from France and Japan*, The 6th MMC Regional Conference, Institute for Population and Social Research, Mahidol University, Thailand, 1 December 2022

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
2. 実用新案登録
3. その他
なし

(別添資料)

調査協力をお願い

この調査は、国境を越えるセックスワークと、セックスワークにおける HIV/STI 予防にかんする研究の一部分です（正確な研究題名は、一番下に書きましたのでごらんください）。研究の目的は、国境を越えてセックスワークをするみなさんにとって実際に役に立ち、かつ、みなさんの権利と安全を守るような対策を提案することです。また、外国人のセックスワーカーのみなさんと関係者にとって、HIV/STI の予防や検査や相談がしやすくなるためには、何が必要かを見つけ出すことです。

そのため、この調査では、さまざまな事情で国外から日本に来て性産業で働いているみなさんにインタビューを行い、来日の経緯や仕事にかんすること、みなさんとブローカー、トラフィックカー、サポーターなどとの関係がどのようなものかについてお尋ねします。これらから得たデータを分析することで、セックスワークをするみなさんの権利を守り、健康その他の危険や不安を減らすような好い仕事環境を作り出し、悪い環境を改善する条件と人間関係を明らかにしたいと考えています。

調査をする私たちは、以上の研究目的を達成し、かつ、みなさんの権利やプライバシーの侵害が起こらないよう細心の注意を払います。また、みなさんに次のことを理解しご同意いただくようお願いいたします。

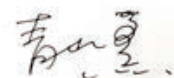
1. 聞き取りの時間は、およそ 1 時間半の予定です。短くなったり長くなったりすることがあります。1 回に 2 時間を超えることはありません。
2. 聞き取りに答えてくださった方には、1 時間につき 3000 円をお支払いします。
3. お支払いについては、領収書へのサインをお願いします。
4. 聞き取りは録音させていただきます。また、簡単な図表への記入をお願いします。
5. もしも録音 NG の場合は、その場でメモを取らせてください。
6. 写真や映像は調査のためには撮影しません。もしも記念のために撮影することがあっても、それは調査には使いません。
7. 聞き取りでは、プライバシーや辛い経験にも触れることがあります。ですから、答えたくない質問には答えなくてかまいません。
8. 途中で回答を中断してもかまいません。
9. 聞き取りに答えると決めても、聞き取りの前、その間、直後、その後のいつでも、「やっぱり嫌だから止める」などと、同意や答えを取り消すことができます。
10. 同意や答えが取り消された場合は、なるべく早く録音やメモなどの記録を破棄します。
11. 同意や答えが取り消された場合にも、聞き取りに使った時間分のお支払いをします。
12. 記録は、この研究・調査のため以外には使いません。
13. 私たち研究者と調査者以外にも、通訳や文字起こしの助手等がみなさんの聞き取りの記録を見たり聞いたりすることがあります。
14. 通訳や文字起こしの助手等がみなさんの聞き取りの記録を見たり聞いたりする場合には、その人たちにもみなさんの権利とプライバシーを守ってもらいます。
15. 記録は、関係のない人が見たり聞いたりしないよう、パスワードなどをかけて安全に保存します。
16. 調査の結果は、報告書や論文、本、プレゼンテーションなどの形で発表します。

17. 発表をするときは、みなさんや関係者に偽名を使い地名を変えるなどして記録を編集し、個人が特定できないようにします。
18. 報告書や論文、本、プレゼンテーションなどが発表された後では、その発表の取り消しをすることは不可能です。
19. 発表された報告書や論文、本、プレゼンテーションなどは、希望があれば、無料で、みなさんが理解できる言葉に翻訳してから差し上げます。
20. この「調査協力のお願い」には、この研究・調査の代表者が責任をもってサインをします。聞き取りが終わった後も、保管しておいてくださると安心です。
21. みなさんは、聞き取りの前でも後でも、いつでも、疑問や質問や相談があれば下に書いた代表者の連絡先、または、別に差し上げる調査者の連絡先にご連絡ください。
22. さらにお聞きしたいことが出てきた場合に、研究者または調査者から連絡して良いならば、電話、ショートメッセージなど、一番良い連絡方法と連絡先を調査者に教えてください。

以上です。ご協力に心から感謝いたします。みなさんの権利と健康と安全が守られることを願っております。

青山 薫（あおやま かおる／Kaoru AOYAMA）

署名



神戸大学国際文化科学研究科 教授
厚生労働省科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）助成「HIV 受検勧奨のための性産業従事者
や事業者等に対する効果的な介入に向けた研究」分担研究者

TEL：090-9981-1562

E-MAIL：kaoru@tiger.kobe-u.ac.jp

大学所在地：657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学国際文化科学研究科